



## 2005 年 忘年会のご案内

12 月 16 日

京都支部では 2005 年の忘年会を下記のとおり開催します。  
皆さまのご参加をお待ちしております。

日 時： 2005 年 12 月 16 日（金）午後 7 時 30 分から  
場 所： 喫酒喫菜 えはら <http://r.gnavi.co.jp/k613500/>  
京都市中京区室町新町の間四条上がる観音堂町 453-1  
TEL:075-212-7054  
(アクセス) 阪急京都本線烏丸駅 / 地下鉄烏丸線四条駅 徒歩 3 分

申込方法： 次のいずれかでお申込下さい。

1. FAX、メールでのお申込み
  - (1)お名前、(2)ご所属、(3)メールアドレスをお知らせ下さい。  
赤澤久弥（滋賀医科大学附属図書館）まで  
(連絡先) TEL 077-548-2080 FAX 077-543-9236  
E-mail akazawa@belle.shiga-med.ac.jp
2. フォームでのお申込み  
京都支部 Web サイトの申込みフォームから  
<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/news/20051216friyep.html>

### [目 次]

忘年会のご案内	...	1
16 世紀フランスの文人出版者アンリ・エチエンヌ 2 世とフランクフルト・ブック フェアのことなど	...	2
人生を変えた 1 冊	...	5
会費納入のお願い	...	6

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール： [dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp) (大学図書館問題研究会京都支部)

URL： <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

## 16 世紀フランスの文人出版者アンリ・エチエンヌ 2 世と フランクフルト・ブックフェアのことなど

堤 美智子

最近、京大附属図書館で現職の若い図書館員達と本の修理に取り組んでいる。もともと、図書館蔵書の大半の分量を占め、図書館資料としての役割も重要である図書の劣化や破損に心痛め、「資料保存」という観点で何か行動を起こさなければいけないという意識から始まった行動である。ワークショップと名付けて毎週、結構楽しく手作業に励んでいる。

その若い仲間から教えられて毎日チェックするようになったのが「ほぼ日刊資料保存—ニュースを世界から」(註1)である。10月6日(木)のニュースに“Google vs. EU 図書館—10月に関係者集め「蔵書のデジタル化と配布」めぐりシンポジウム”という見出しが目についた。資料のデジタル化がやかましい昨今、「ああまたか」というところだが、筆者にとっては目下の関心事のひとつがフランクフルト・ブックフェアの歴史であるところから、“10月21日に、ドイツのフランクフルトで開催される国際ブックフェアにおいて両者の代表的な論客が集う。”とこの記事最後の文章に注意を惹かれた。

16世紀後半のヨーロッパで、学者であり、印刷出版業者であったアンリ・エチエンヌ2世(Henri Estienne II)は彼を取り巻く政治的状況の故、出版した本を売りさばくのに困難な境遇に追い込まれた。そんな中でアンリ2世は『フランクフルト書籍市への賛辞(Francofordiense emporium, sive Francofordienses nundinae)』(註2)を執筆、フランクフルト書籍市へ献呈している。はるか500年ほど昔の一出版者と現在までも国際的に著名なフランクフルト・ブックフェアの関係を述べて出版文化、書籍文化の歴史はその文化を取り巻く社会の状況に大きな影響を与え、与えられるということを読んでいただこうと思う。

エチエンヌ家は初代アンリ、息子ロベール、孫のアンリ2世(フランクフルト賛辞の当人)と3代に渡って16世紀に活躍した有名な学術出版の元祖と言える一族。これまた、著名な印刷者であり出版人であるベニスのアルドゥスの向こうを張ってパリで活躍していた。父ロベールは印刷者、学者としてフランスにルネサンスを導入する上で重要な役割を果たしたと言われる。しかし、晩年に教会の承認なしに新約聖書の改訂版を出版したことから宗教界と争い、カトリックとプロテスタントの政治的な紛争にまきこまれたためジュネーブに移住した。

ロベールの息子、アンリ・エチエンヌ2世は1528年、パリで生まれた。この文章の主人公であるアンリ2世が仕事を始めたのは父ロベールの亡命先であるジュネーブにおいて1557年であった。1572年には有名な『ギリシャ語辞典(Thesaurus linguae graecae)』(註3)を出版するが、まったく売れず、ヨーロッパ中を旅して売りさばかなければならなかった。売れなかった原因は弟子のスカブラが師、アンリのオリジナル版からの海賊版をこっそり出版し、安い価格で売りさばいたからである。

この時代は西欧では、日本では、どのような状況にあったのだろうか。

アンリ・エチエンヌ2世が生まれた翌年1529年、キリスト教世界では、ルター派を弾圧するヴォルムス勅令が出されたため、ルター派の諸侯は帝国議会に対してこれに抗議した。プロテスタントの名前の由来である。そして、遂に1557年2月13日フランス国王アンリ2世は歴史に悪名高いユグノー教徒弾圧のために異端審問所を設ける。そして前記のようにこの

年、エチエンヌ家はパリからジュネーブに逃れる。更に 1572 年 8 月 24 日パリにおいて、サン・バルテルミの虐殺（カトリック教徒がユグノー貴族を虐殺した）がおきてしまう。

日本ではどのようなことがあったのだろうか。アンリ 2 世がジュネーブで出版を始めた頃 1557 年、ポルトガル人宣教師ルイス・デ・アルメイダが豊後に病院を完成、日本で初めて西洋医術による外科手術を行う。キリスト教（カトリック）宣教師によって西欧の文明が日本にもたらされ、定着しつつあった。そして、アンリ 2 世がギリシャ語辞典を出版した翌年である 1573 年将軍足利義昭が織田信長に降伏し、室町幕府が滅びる。

さて、次にフランクフルト・ブックフェアについて見てみよう。“フランクフルトの市の最盛期は 16 世紀である。ヨハネス・フォン・ゾエネスト、ミシルス、アンリ・エチエンヌ、ランシウスその他の人びとの賛辞が市に呈された。フランクフルトの市は交換よりもすぐれて売買の場であった。したがって、それは他の市より安定性と永続性に富んでいた。”（註 4）“さらに、また、フランクフルトはじきに印刷資材の大市場にもなった。印刷業者はここでドイツ人の活字鋳造工と活字彫り、それもとくに地元の業者から活字一式と母型を購入した。仕事を探していた木版画師や銅版画師も姿を見せるようになり、16 世紀末、大市は次第に出版関係の事柄に関心のあるすべての人びとの落ち合う場所となっていく。こうして大市は、大勢の人びとが集まってごった返し、アンリ・エチエンヌをはじめ当代の作家たちがしばしば好んで描写した、趣のある光景を呈する…。これを見て、アンリ・エチエンヌはフランクフルトを「新アテネ」と呼ぶのをためらわなかった。そこにはまさしく、シェークスピアの興味を唆ったでもあろう光景がくりひろげられていたのである。”（註 4）グーテンベルクが活版印刷術と鉛合金活字の技術革新を果たした 15 世紀半ばのドイツにおいては、その時代以前には木版や銅版による印刷物の制作、出版が盛んであったという伝統があった。グーテンベルクの活版印刷術はいきなり、降って湧いたのではなかったのである。

グーテンベルクの活版印刷術新技術によって、木版画師や銅版画師は仕事を大幅に奪われざるを得なかった。そして、さらに、“フランクフルトの大市が打ち出した最も独創的な新機軸のひとつは、新刊書の情報を即時提供する現代の無数の出版目録の祖先、すなわち大市の目録の刊行である。… 十六世紀にはいると出版業者は自らの出版した書物を宣伝するために自店の目録を印刷、配布するようになった。… ロベール・エチエンヌが一五五二年と一五六九年、そして… 同種の目録を世に送っている。”（註 5）

今日、私たちが日常目にする『これから出る本』などの出版目録の起源もフランクフルト・ブックフェアにあると言えるようだ。

この 16 世紀最大の書籍大市でアンリ 2 世は出版人の生命を賭けて出版した『ギリシャ語辞典』を売りさばくことができた。この市の盛況に助けられたと言える。辛うじて破綻から免れたのだろう。アンリ 2 世はフランクフルト・ブックフェアへ賛辞を献呈した 1574 年から 24 年後、1598 年にフランス、リヨンの市立病院で死去。決して裕福な晩年ではなかったようである。彼の学問的遺産は娘婿アイザック・カソボーンを通じてイギリスに伝えられた。アンリ 2 世の『フランクフルト書籍市への賛辞 (Francofordiense emporium, sive Francofordienses nundinae)』はどのような意味をもっているのだろうか。註 4 に挙げた『出版産業の起源と発達』の著者が 1910 年に書いた序文の『フランクフルト書籍市への賛辞』についてふれている部分から引用する。“エチエンヌが戦争の惨禍から自由でありえなかったことは、事業に失敗し貧乏に苦しんだ彼の晩年によく示されている。だからフランクフルトの市に関するこの小さな作品はある意味では商業の国際性をもとに、ヨーロッパの平和を基こうとする願いをうたったものといえよう。それは高遠な理想主義においてモアの“ユートピア”におよばず、その論理と風刺においてエラスムスの“平和を求めて”に、また歴史的学識においてはグロティウスの“戦争と平和”におよばない。しかしそれは、これらのいずれにも似

たところをもっている。それはヨーロッパの平和に対する願いを、道徳的にではなく知的に謳ったものであり、今日ライブチヒの出版産業が同じ目的のために全世界の大学に協力している如く、当時の学術的精神や一般的知的運動の促進に力のあったひとつの制度に対する一学者の優雅で感謝にみちた賛辞となっているのである(原文のまま)。”

ここで最初に戻るが、「Google 対 EU 図書館」と呼ばれたシンポジウムである。どういうことかを見てみる。2005年10月6日(木)の「ほぼ日刊資料保存」のニュースから紹介する。

Google が Google Print という名称で米英の大学図書館と協力して蔵書のデジタル化を行い、ネット上での検索と配布ができるようにする、というプロジェクトについては良く知られている。それに対して、“それは米英を中心としたアングロサクソン文化帝国主義であると真っ向から反旗を翻し、独自の協力体制による同種のプロジェクトを始めようとしているフランスやドイツ等の EU 加盟国図書館が、当の Google と米英図書館を相手に、出版人も交え、この問題を巡ってシンポジウムを開催する。国際図書館連盟 (IFLA) と国際出版社連盟 (IPA) の共催によるもので、10月21日に、ドイツのフランクフルトで開催される国際ブックフェアにおいて両者の代表的な論客が集う。”というものである。

Google Print が“アングロサクソン文化帝国主義”であるという捉え方をされることに東洋人である筆者は思いもよらなかった。16世紀のヨーロッパでも、21世紀の欧米でも政治や経済と図書出版や図書情報流通とは相互に深い影響関係にあるものという実感を持った。当たり前のことと言えばそれまでだが、たまたま筆者自身が興味を抱いていた事柄が 500年の歳月を越えて結びついたので紹介してみた。

2005年の10月、フランクフルト・ブックフェアでのシンポジウムでどのような議論があったのか、いずれまとめられるであろうレポートを読んでみたい。

註1 ほぼ日刊資料保存—ニュースを世界から

[http://www.hozon.co.jp/hobo/hobo\\_top.htm](http://www.hozon.co.jp/hobo/hobo_top.htm)

註2 フランクフルト書籍市への賛辞 (Francofordiense emporivm,

sive Francofordienses nvndieae) [Geneva] : Henri Estienne, 1574. 8vo, [8], 31, 12pp. Estienne's printer's device on title. は再版されなかったので(300年間) 非常な稀観本である。\$7,500 (約90万円) (E.K.Schreiber Rare Books. New York のインターネットカタログによる。)

註3 Thesavrvs graecae lingvae / ab Henrico Stephano constructus ; in quo praeter alia plvrima quae primus praestitit, (paternae in Thesauro Latino diligentiae aemulus) vocabula in certas classes distribuit, multiplici deriuatorum serie ad primigenia, tanquam ad radices vnde pullulant, reuocata. [Geneva?] : Henr. Stephani Oliva, [1572?] 5 v. in 4 ; 35 cm (古書店 崇文荘書店のカタログ No.468、2005年では価格787,500円)

註4 出版産業の起源と発達 : フランクフルト・ブックフェアの歴史 / J.W.トンプソン ; 箕輪成男訳 出版同人 1974 より

註5 書物の出現 / リュシアン・フェーブル ; アンリ=ジャン・マルタン共著 ; 関根泰子他訳 ちくま学芸文庫 より

## 人生を変えた1冊

田北 十生

私の大図研京都への投稿の最後として、荒っぽいけど、私個人の課題であった一つについて書いてみたいと思います。

私は、僧侶の父を持ち、父が仏教とフロイトの精神分析学を融合しようと試みている姿を見ながら、複雑な家庭で、悩み多き青春時代を過ごしました。そういうことがあったためか、中学に進学したころから、ゲーテ、ヘッセ、芥川の作品やフロイト、ユングの著書を読みあさり、人生って何だ！生きる意味とはなんだということを自分なりに徹底的に問い詰めてきました。必要な本は、すべて父の本棚から得ました。しかし、当時は、「人生のゆるぎない真実は、人は日々死に向かって進んでおり、何人もこの真実から逃れることは出来ない。すなわち人は死ぬために生きている。」という絶望的な結論しか持ち得なかった。そのときの事は今も鮮明に記憶に残っています。私は、駒場の東大キャンパスに隣接した叔父の家に下宿し、駿台予備校に通っていました。晩秋の夕方、机に向かい、窓の外の紅葉した庭木の葉が風で飛ばされていくのを眺めながら、ただただ泣きました。涙が止まらなかった。生まれてこなければ良かったとさえ思いました。従って、長い間死ぬことだけを考えて生きてきた。「自殺」を恋していたといっても過言ではなかった。

そんな私の考えを変え、生きる意味を教えてくれたのは、V・E・フランクルだった。それは「私たちが『生きる意味があるか』と問うのは、はじめから誤っているのです。つまり、私たちは、生きる意味を問うてはならないのです。人生こそが問いを出し私たちに問いを提起しているからです。私たちは問われている存在なのです。」（「それでも人生にイエスと言う」p27）「生きている意味がはっきりと問題視される時、すでに生きている意味がどこか疑わしいものになってしまっています。けれども、人間として生きている意味を疑うと、絶望にいたるのは簡単です。この絶望は、自殺を決断するという形で、私たちの前に立ちあらわれます。」（同前述p19）という言葉だった。

フランクルのこの言葉は、私にとって大きな衝撃だった。本を持つ手が震え、胸が高鳴った。目からうるこという言葉は、このときのために用意されたもののように感じました。自分の人生の答は、外にあるのではなく、自分の中に、自分の責任の一部として自分で作れというのだ。何故か私には、非常に嬉しかった。夢中でフランクルの著書を買集め読みふけりました。

しかし、私はフランクルの言うように自殺はしませんでした。親しかった高校の級友は、卒業式の翌日自殺してしまいました。私が自殺できなかった理由は、「一度自殺したら、二度と、あのきれいな夕焼けを見ることが出来ない」というしごく単純なことでした。フランクル流に言えば、その時の私の人生は「きれいな夕焼けを眺めることができる」という意味があったのだと思う。

フランクルに出会ってからの私は、自分の死を正面に見据えながら、かけがえのない時間を大切に生きています。

フランクルの言葉で結べば「苦難と死は、人生を無意味なものにはしません。そもそも苦難と死こそが人生を意味のあるものにするのです。」(同前述 p49)

<参考>

「それでも人生にイエスと言う」V・E・フランク著 山田邦男 | 松田美佳訳  
春秋社 (第6刷) ISBN4-393-36360-4 coo11 P1751E

たきた かずお (大図研京都支部員)

### ◇ 会費納入のお願い ◇

会員みなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。  
大図研会費および京都支部会費の納入をお願い致します。残念ながら会費の納入率は現在、思わしくない状態にあります。会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、セミナー開催などにも悪影響を及ぼします。  
既に2005年度(大図研会計年度2005.07-2006.06)に入っておりますので、2005年度の会費の納入をお願い致します。また、2004年度以前の会費を納入いただけていない会員みなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

大学図書館問題研究会費 ￥5,000

京都支部会費 ￥2,000

---

合計 ￥7,000

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願い致します。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 dtkk@rg7.so-net.ne.jp までお願い致します。